

John Gower とイベリア

越境する知と翻訳

小林 宜子

「知恵と助言の文学——中世後期イングランドとイベリアからの視点」と題するシンポジウムの一環として行われた本発表では、「君主の鑑」の伝統に連なる John Gower の *Confessio Amantis* 第 7 巻に注目しつつ、イベリアとの関連性という視点から本詩の解釈に新たな光を投じることを試みた。

Gower が 1386 年頃から 1392 年頃にかけて執筆したとされる *Confessio Amantis* は、枠物語の構造を有しており、実らぬ恋に悩む男性 Amans と、愛の女神 Venus に仕える Genius との対話が枠の部分で展開する。Genius は、恋愛にまつわる主人公の苦悩に耳を傾け、その成就を助ける存在として描かれる一方で、聴罪司祭としての役割も担っている。その役割を忠実に遂行すべく、Genius は数多くの例話を交えながら七つの大罪について詳細な解説を試みる。詩の第 6 巻までは、七つの大罪の各々に 1 巻ずつを費やしながら物語が進行するが、貪食の罪を論じた第 6 巻の巻末でアレクサンドロス大王の実の父とされるネクタネブスの物語が語られると、それまできわめて受動的な態度で Genius の話を聴いていた Amans が俄かに興味を示し、アレクサンドロスがアリストテレスから受けた教育について仔細を知りたいと切望する。Genius は人間にとって知恵がいかにも有益であるかを述べた後、Amans の希望に応じてアレクサンドロスが受けた君主教育の内容を語り始める。

続く第 7 巻は、*Confessio Amantis* の現存写本の 1 つ (Cambridge University Library, MS Mm.2.21) で Sapiencia (「知恵の巻」と題されており、その典拠となったのは、偽アリストテレスの *Secretum secretorum* (『秘中の秘』)、聖アウグスティノ会所属の神学者であった Giles of Rome によって 13 世紀後半にラテン語で執筆された *De regimine principum* (『君主統治論』)、同じく 13 世紀後半にフィレンツェ出身の思想家 Brunetto Latini がフランス語で著した *Trésor* (『宝典』)) である。

七つの大罪から君主教育へと話題を大きく転換させる第 7 巻冒頭の展開は、やや唐突な印象が否めない。しかし、14 世紀当時の読者たちはそれほど大きな違和感を覚えなかった可能性がある。Hans-Joachim Schmidt は、*De regimine principum* の現存する写本の構成を綿密に調査したうえで次のように論じている。

The texts with which the Latin version [of *De regimine principum*] was combined in manuscripts reflect a close connection to moral didactics addressed to all, not only to rulers. A typical example is the manuscript that was kept in the Franciscan monastery of London, which, in addition to the *regimen principum* also includes John of Wales's confessional treatise *Tractatus de penitentia* and his *De septem viciis*. Giles's text was often combined with texts offering practical guidance for daily life, schoolbooks, and excerpts from sermons. (496)

ここで Schmidt が指摘している重要な点は、*De regimine principum* が政治的指導者のみならず、万人に向けた道徳的指南書として受容されていたという事実である。Giles 自身も、自らの著作について次のように述べている (John Trevisa による本書の英訳から該当箇所を引用する)。

For theigh this book be itytled of the lore of princes, 3ut al the puple schal be itau3t þerby; and theigh nou3t eueriche man may be kyng oþer prince, 3it eueriche man schulde desire besiliche to make himself worthi to be a kyng oþer a prince. (7)

同様の主張は *Secretum secretorum* にも見出される。この書物の根底には、小宇宙と大宇宙の照応に関する思想が重要な意味を持って存在するが、人間を表す小宇宙は王国にも譬えられており、Roger Bacon が注釈を施したラテン語版には、たとえば次のように書かれている。「至高の神が人間をお造りになり、すべての生き物の中で最も高貴な存在になされた時、(中略) 神は人間の身体を都市に見立て、人間の知性をその都市国家の王と成し、人間の身体の中で最も気高い場所、すなわち頭部に配置したのである」(132)。

個々の人間は自らの体内に王国を有しており、道徳的な規範に則って正しくこれを統治すべきだという思想は Gower の君主教育論を特徴づける考え方でもある。そのことを端的に表現した一節が *Confessio Amantis* 第 8 巻に含まれている。「万人がそれぞれに統治すべき王国を所有している。それこそが彼自身の領地である。もしその王国を誤って統治したら、人は己を失ってしまう。それは船や糧を失い、それに伴ってこの世の富のすべてを失うよりもはるかに甚大な損失である every man for his partie / A kingdom hath to justefie, / That is to sein his oghne dom. / If he misreule that kingdom, / He lest himself, and that is more / Than if he loste schip and ore / And al the worldes good withal」(CA, VIII. 2111-17)。したがって、Gower が第 7 巻に記した数々の教訓は政治的指導者のみならず、万人が学ぶべき教えとして提供されていると考えるのが妥当である。君主のみならず、彼を支える助言者たちもまた知恵を養う必要があると Gower は第 7 巻の 4011-14 行で論じている。民衆の声のうちにも傾聴すべき知恵が含まれている可

能性があり、君主はそうした声にも謙虚に耳を傾けなければならない(同巻 4019–25 行)。知恵がこのように共同体の構成員に遍く共有されるようになれば、共同体内の倫理的規範が堅固に維持され、政治的調和と安定がもたらされる。Gower にとって、知恵は決して指導者のみが占有すべきものではないのである。

知恵を共同体内に遍く普及させるためには、知恵を俗語で伝授することが必要になる。そのことを暗示するような物語が *Confessio Amantis* 第 1 巻に含まれている。第 1 巻は傲慢の罪を扱った巻であるが、その物語は傲慢の対極にある謙虚の美德を例証する話で、第 1 巻の巻末に置かれている。物語の舞台はイベリアである。物語中でこの地を支配しているのは Alphonse という名の王で、賢人として知られている。しかし彼は己の知恵に陶醉するあまり、彼の知性を凌駕するような頭脳の持ち主に敵意を抱き、そうした知力を有する騎士 Petro に 3 つの難解な謎を課して彼を陥れようとする。絶望する Petro を窮地から救ったのは彼の娘の Peronelle で、彼女は 3 つの問いの答えがそれぞれ大地、傲慢、謙虚であることを見抜き、王を驚愕させる。王が Peronelle の知恵に心を打たれ、己の傲慢を恥じる件は、コリントの信徒への手紙 1 章 27 節に含まれる次のような一節を想起させる。「神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました」(新共同訳)。無力で無学な Peronelle が体現する知恵は、ラテン語の書物を通じて得られる学識とは別種のものである。それはむしろ、*Confessio Amantis* 第 7 巻において統治者が傾聴すべき対象とされた民衆の声に近いものと考えられる。Gower は自作の詩の中で繰り返し「民の声は神の声である」と語っているが、それは俗語によって伝授される知恵のあり方を示唆するものとも解釈できる。

この“Tale of Three Questions”について、Gower はある年代記に取材したものと述べている。イベリアが物語の舞台となっているため、その地域で書かれた年代記を想像するが、物語の典拠はいまだに不明である。唯一確かなことは、物語中で Peronelle が辿り着いた 2 つの正解があたかも格言のように Gower のフランス語による長編詩 *Mirour de l'omme* の 12601–09 行に含まれていることである。この一節が Gower 自身の創作によるものなのか、イベリアに由来する格言なのかも不明である。しかし *Mirour de l'omme* の別の箇所に移すと、イベリアとの関連を明確に示す興味深い一節(13675–80 行)が見出される。それは 12 世紀に Petrus Alfonsi が著した説話集 *Disciplina clericalis* からの引用で、助言に関してある賢者が語ったとされる教えの内容となっている。Petrus Alfonsi はアラゴン王国のアルフォンソー一世の宮廷医を務めた人物で、1106 年にユダヤ教からキリスト教に改宗した。*Disciplina clericalis* は全体がゆるやかな枠構造を成しており、父と子、あるいは教師と生徒の対話を通じて、人生の指針となるような賢者の格言や訓戒などが例話を交えて語られている。例話や格言の多くはイスラーム世界で開花した教訓文学や知恵の文学を源泉としたもので、*Secretum secretorum* からの引用も含まれており、東洋と西洋を架橋するような重要な作品である。Chaucer の *Canterbury Tales* に含まれる“Tale of Melibee”にも引用されていることから、Chaucer の作品と地中海研究との接点を模索する批評家の間でも関心が高まっている。

Gower とイベリアとの関係は、彼の作品中に含まれるイベリアへの言及のみには止まらない。15 世紀に *Confessio Amantis* は海を渡ってイベリアで翻訳され、新たな読者を得ることになる。Gower はヘンリー 4 世を輩出したランカスター家と浅からぬ縁で結ばれていたと言われているが、そのランカスター家出身のフィリパが 1387 年にポルトガル王ジョアン 1 世に嫁いだ後、*Confessio Amantis* はポルトガル語に翻訳され、そのポルトガル語版(*Livro do Amante*)からの重訳として、後にカスティリーヤ語版の *Confisyon del Amante* が成立した。Jamie K. Taylor は、Chaucer の作品の Europeanness が論じられる際に、イベリアがつねにその議論から除外されてきたことを批判的に指摘したが(29)、イベリアを視野に収めることの重要性は、むしろ Gower の作品においてこそ如実に示されていると言ってよい。

引用文献

- Bacon, Roger. *Secretum secretorum cum glossis et notulis*. Ed. R. Steele. Oxford: Oxford UP, 1920. Vol. 5 of *Opera hactenus inedita Rogeri Baconi*.
- Gower, John. *Confessio Amantis*. Ed. Russell A. Peck. 3 vols. Kalamazoo: Medieval Institute Publications, 2000–04.
- . *Mirour de l'Omme. The Works of John Gower. Vol 1: The French Works*. Ed. G. C. Macaulay. Oxford: Clarendon Press, 1899.
- Schmidt, Hans-Joachim. “The Use of Mirrors of Princes.” *A Critical Companion to the ‘Mirrors for Princes’ Literature*. Ed. Noëlle-Laetitia Perret and Stéphane Péquignot. Leiden: Brill, 2023. 473–513.
- Trevisa, John. *The Governance of Kings and Princes: John Trevisa’s Middle English Translation of the De regimine principum of Aegidius Romanus*. Ed. David C. Fowler, Charles F. Briggs, and Paul G. Remley. New York: Garland, 1997.
- Jamie K. Taylor. “The Mediterranean World.” *The Routledge Companion to Global Chaucer*. Ed. Craig E. Bertolet and Susan Nakley. New York and London: Routledge, 2025. 29–36.